

博士論文を執筆して

菅原裕子

11 月末、博士論文を事務所に提出しました。学生生活に終止符が打たれたわけではありませんでしたが、原稿がいったん自分の手から離れ、やっと大きな区切りがつきました。とりわけ、博士課程 3 年目に入ると同時に実質的には追い込み作業に入っており、精神的にも常に追い立てられていましたので、やっとゴールが見えたことの開放感は想像以上に大きなものでした。

論文については、とにかく仕上げたという思いと共に、自分の未熟さを痛感するという複雑な思いを抱いています。ただ確かなことは、本研究科に修士入学してからの 5 年間で、博論とそれに付随する投稿論文を、学会誌発表分も含め、自分の足跡として残せたという喜びです。教養をつけたいと漠然と考えて入学した私が、このように自分なりに論文をまとめることができたのはある意味不思議で、縁のようなものさを感じます。

それほど珍しいケースではありませんが、現役で入学してくる学生が多い中、私はかなり遅れてきた院生でした。それ自体はハンデでしたが再び学生に戻った喜びは大きく、多岐に及ぶ分野を網羅する先生方の授業の影響も絶大で、一気に目を見開かれました。進学して研究を続けたいという気持ちが固まったのは、1 年の冬頃でした。

ですので、私にとって学生生活で最も重要なことはやはり博論の執筆でした。映画論に関する研究ですが、原動力となったのは、映画とそれについて考え、書くことが好きでたまらない、これだけは誰にも負けないという自負だけだったかもしれません。そしてそんな気持ちを支えてくれたのは、博士課程に進学した際、主指導教員の吉村先生からいただいた「大事なことは研究を『楽しく』進めることです」というお言葉でした。予定通りに筆が進まない現実や、自分の能力不足に苛立つことの連続でしたが、結果的にこのお言葉を裏切ったことは一度もありません。他の先生方にもいろいろと相談に乗っていただき、友人たちと愚痴も含めてあれこれと語り合えたことも大きな助けとなりました。決して楽な道ではありませんでしたが、ここに来ていなかったとしたら、今以上に充実した生活を送っていたとは思えません。

今、やっとスタート地点に立ったばかりです。この 5 年間、励ましてくださった皆さん、そしてなにより、好きなことを思う存分やれる場を与えられたことに対する感謝の念を忘れず、今後とも研究に邁進していきたいと思います。

